

手足の不自由な子どもたち

# はげみ

令和6年度/No.417

8/9

August — September

**特集** 音楽・表現活動



第42回（令和5年度）肢体不自由児・者の美術展入賞作品『山が見える海』  
田中 祐輔



# はげみ

令和6年度 / No.417

# 8/9

August — September

## 特集 音楽・表現活動

### 目次

### Contents

広場	音楽の恩恵、「だれでも音楽教室」への夢	北住 映二	2
Sec.1	音楽を使った表現活動の魅力と意義	吉村 温子	4
Sec.2	児童発達支援施設での音楽活動	千葉 麻衣 / 小西 信麻子 / 岡田 奈美 / 佐藤 靖典 / 田中 来未 / 竹本 春菜	12
Sec.3	特別支援学校での音楽の実践		
	①特別支援学校における「音楽」について	菅野 和彦	18
	②～アプリケーション「Medly」を活用した音楽づくりと鑑賞～	椛沢 光靖	24
	③神奈川県立麻生支援学校アートコース音楽グループの取り組み	篠田 瞳	30
Sec.4	タブレット端末を使い、すべての子どもが 音楽の楽しさを味わえる授業をめざして	小梨 貴弘	36
Sec.5	成人の施設での音楽活動への取り組み 社会福祉法人あすはの会 音楽療法コミュニティスタッフ 東村 由美子 / 中川 志乃里 / 工藤 美抄 / 横瀬 侑子		42
Sec.6	音楽を奏でる喜び		
	①「ひとさし指のノクターン」	宇佐美 希和 / 宇佐美 泉	48
	②音楽を奏でる喜びを支えて	永杉 理恵	51
コラム1	演奏支援システム「だれでもピアノ®」について	永杉 理恵	54
Sec.7	音楽を伝える、音楽で伝える ～大切な方を下支えされているあなたへ～	式町 水晶	55
コラム2	ユーチューブ (YouTube) で視聴できるお勧めの曲と演奏など	北住 映二	60
	今号の表紙	田中 祐輔	62

# 広場

## 音楽の恩恵、 「だれでも音楽教室」への夢

心身障害児総合医療療育センター

むらさき愛育園

名誉園長

編集委員

北住 映二

### 音楽の意義の例

私は音楽が好きで音楽を心の支えにして生活していますが、小児科医としての仕事の中でも音楽の意義を大きく感じさせられることがあります。例えば、次のような実際の例です。

■「鳥の歌」を聴くと機嫌が良くなる…外来で診療を担当している肢体不自由と知的障害のある成人の方で、機嫌が悪く大声も出てしまいがちな時に、「鳥の歌」（チェロ奏者のカザルスがスペイン民謡を編曲した曲）の曲を流すと途端に機嫌が直りニコニコと笑顔になる。

■クラシック音楽を聴くと喘鳴が改善する…寝たきりの重症心身障害で重度の嚥下障害もあり唾液や痰などの吸引が必要な子どもで、学校通学のための医療的ケア児専用通学车両に母親なしで安定して乗れる方法を検討した例。体を起こした姿勢では唾液の気管への誤嚥などにより喘鳴（ゼ

コゼコ、ゼロゼロなどの音）が出やすく、水平の姿勢の方がこれが軽減する（『呼吸障害のある子どもへの支援』日本肢体不自由児協会発行、16頁参照）ので、軽い横向きで水平の姿勢とするとともに、好みのクラシック音楽を聴いていると体の緊張が和らぎ、喘鳴も改善するので、クラシック音楽を乗車中に聴いていられるようにした。

### 音楽の効用、恩恵

音楽を聴くことにより幸福感を与える脳内伝達物質であるセロトニンが増えると言われています。確実なデータがある訳ではないようですが、紹介した例からもそうであろうと推測されます。音楽を演奏することや勢いのある音楽を聴くことにより、活動性を支える脳内伝達物質であるドーパミンが増えるという報告もあります。

「音楽で心が安らぐ」「音楽で元氣付けられる」「歌って楽しむ」「楽器を弾いて、鳴らして、楽しむ」「音楽に合わせて

て体を動かして楽しむ」「仲間と一緒に演奏して楽しむ」「音楽で表現する」「音楽でコミュニケーションする」「音楽で伝える」など、音楽には多様な意義と効用があります。

肢体不自由や知的障害のある子どもが、成人期までも含め、さまざまな意味での音楽の恩恵を享受し、楽しみ、心の糧にできることを願い、そのための関係者の有意義な情報共有となる内容となるようにと、この特集を企画しました。

タブレットPCが子どもたちに学校で1人1台ずつ貸与支給され、また、YouTubeなどインターネットで音楽・動画が視聴や入手しやすくなっている現状から、その利点も生かされるようにという主旨からの解説や紹介もお願いしました。

### 「だれでも音楽教室」への夢

私は学生時代に始めたチェロの演奏を趣味としており、多忙だったため1年で数日しか弾かない状態が続いていましたが、仕事が非常勤となり弾く時間が取れるようになり、また、室内楽レッスンもある音楽教室でピアノやヴァイオリンとの合奏もできるようになり、あらためて音楽を演奏できることの楽しさ、喜びと幸せを感じています。大げさなようですが、音楽を演奏することが人生の大きな支えの一つになっています。

多くの人たちが、障がいがあっても子どもの時から音楽を演奏する喜びを体験し持続できることを願って、その一例として、Sec. 6の「音楽を奏でる喜び」の文章執筆をお願いしました。環境や出会いに恵まれての特別な例ということではなく、本人の希望や意向とそれを支える人た

ちのかかり方への示唆になるものと思います。

ピアノなどの楽器が弾けるようになりたい、しかし、肢体不自由などの障がいがあると教えてくれる場がなかなかない、適切に教えてくれる人もいないという実情があります。障がいがあっても通えて適切に指導してもらえ音楽教室ができると良い、さらに、保護者・家族も教えてもらい本人と一緒に演奏を楽しめるようにもなるというような「だれでも音楽教室」が各地にできると良いと思います。楽器だけでなくタブレットPCを使っていると音楽を楽しむ方法の指導の場も沢山あって良いと思います。協力してくれそうな関係者に呼びかけながらその実現に向けて準備を進めたいと考えています。

### 「共生社会」の中での音楽

私たち療育関係スタッフは、障がいのある子どもやおとなやその家族の方々を支えることによって自分自身が精神的にも支えられているという思いを強く感じることがしばしばあります。「共生社会」は、「支え、支えられる」社会であり、また、「お互いが、支えることによって支えられる」社会です。

この大切なことの認識をあらためて深めるメッセージをいただいた式町さんの文章を初め、熱意と経験、工夫などがたくさんもった文章を執筆の方々からいただきました。音楽は「共生社会」のための重要なツールでもあるとあらためて感じました。この特集号が、音楽の恩恵を多くの人々に分かち合える一助となれば幸いです。